

## 訳者あとがき

——一人ひとりの宇宙が発する幽かな光を紡いだ七編

本書は二〇〇八年に韓国で出版された、チョ・ヘジン（성진）の作品集『天使たちの都市』(원사들의 도시) (民音社)の全訳です。

訳者が原作と出会ったのは、数年前、深い悲しみの中にいた頃でした。心にぽっかりと大きな穴が空いてしまったようで、ぼんやりした日々を過ごしていました。そんなとき、偶然目にした本のタイトルに「天使たち」という文字を見つけ、その言葉に導かれるようにして手に取ってしました。

心のどこかで天界にいる天使たちのおとぎ話のような物語を期待してページを繰ると、そこにあったのは、地球という惑星の片隅で、社会から零れ落ちそうになりながらも必死に生きる「人間たち」の姿でした。

\*

\*

チョ・ヘジンは二〇〇四年に本書収録作品「女に道を訊く」で文芸中央新人文学賞を受賞し、二〇〇八年に初の作品集となる本書『天使たちの都市』を発表した。初の作品集にして韓国文学芸術委員会により二〇〇九年の優秀文学図書に選ばれている。その後、北朝鮮を脱し、ベルギーに渡った青年の足跡を辿る長編小説『ロ・ギワンに会った』(二〇一一年)で申東暉文学賞を、短編集『光の護衛』(二〇一七年)で白信愛文学賞を、韓国で生まれ、フランスに養子に出された女性の視線で生命の尊さを描いた『かけがえない心』(二〇一九年)で大山文学賞を受賞。他にも若い作家賞、李孝石文学賞、無影文学賞など、韓国の名だたる文学賞を次々と受賞し、チョ・ヘジンはいまや名実ともに韓国の文壇をリードする女性作家の一人となっている。

これまで長編、短編を問わず数多くの作品を執筆しているが、文学賞受賞作品集やアンソロジーなどを含めると、デビュー以降ほぼ毎年、作品を発表している。その中で彼女が一貫して描き続けているのは、自ら声をあげる術を知らない、あるいは主張することを許されない社会的弱者の姿だ。時には公権力による暴力の犠牲者が主人公となり、またある時は日常に潜むいじめや差別といった個人と個人、個人と社会の関係の中で生まれる暴力性を告発する。歴史に翻弄された「異邦人」とみなされる同胞の姿もたびたび登場する。社会の一番外側に追いやられた「他者」

に目を向け、心の深淵に潜む感情をあぶり出す作家を、文壇では「他者の作家」と呼び、「人間の本质上に直面することを恐れない真摯な情熱」と評している。その真摯な視線は作家の素朴な願いから生まれている。

「いい小説を書きたいという思いが一番ではありますが、その気持ちと同じくらい、素敵な人間になりたいとも思っています。素敵な人とはどういうことかと訊かれるかもしれませんがね。私は「優しい人」も素敵な人に含まれると思っています。優しいだけでは小説は書けないと言われることもありませんが、それでも、私は優しい人間でありたいのです。お人好しという意味ではなく、他者の見えない涙まで想像できる優しさを持つ……」

（作家チョン・セランによる著者インタビュー、「Litnet」六号、民音社、二〇一七年）

『天使たちの都市』は七編の中短編小説から構成されているが、どの作品も、その根底にあるのは孤独と暴力だ。たいていは物理的な暴力というより、無知、無関心が引き起こす精神的暴力に孤独を感じている。チョン・ヘジンの作品らしく、登場人物は皆、メインストリームとはほど遠い社会の縁で、容赦なく巡ってくる毎日をなんとか消化している人々である。

主人公たちを取り巻く状況は一樣に過酷だが、作家は彼や彼女たちの苦しみや悲しみを声高に

描出することはせず、まるで自分のことのように淡々と、とつとつと表現している。「天使たちの都市」の十九歳の〈きみ〉や、「インタビュー」の主人公で高麗人三世のナターリアは韓国語がほとんど話せず、それぞれ相手との言語によるコミュニケーションは不可能に近い。たとえ同じ母語を共有していても、「女に道を訊く」の〈わたし〉の夫だった〈彼〉はどもりがちで、わたしと彼の間で会話はほとんど交わされず、彼を慕い、〈わたし〉にとっては疎ましい存在だった巨人症の女は生まれつき話すことができない。だが、「天使たちの都市」の三十二歳のわたしと十九歳のきみは互いに一生忘れられない恋をし、システムキッチンのショールームにひとり取り残されたナターリアは、自分との「インタビュー」という一風変わった形で誰にも語ることをなかった心の内を読者だけに明かしている。「女に道を訊く」では〈彼〉がある日突然、交通事故で死んでしまうと、〈わたし〉はこれ以上沈黙の中で生きていく意味を見失い、海で後追い自殺を図るが、そのとき浜辺から呼び止めたのは口のきけない巨人症の女だった。饒舌な言葉が介在せずとも人は心が通い、目を向けるだけで時として互いに光を見いだせることが伝わってくる。そもそも「感情を見透かした言葉などなくて、だから刹那に存在する無限大の感情は、精製されつくした果てにたった数個の単語となって不透明に、未完成のまま発話されるもの」（天使たちの都市）だとしたら、脳裏に浮かんで消えていったコトバの方が大きな力を持つものなのかもしれない。だからか、表題作「天使たちの都市」の〈きみ〉に届くことのなかったラストのコトバ

を何度も読み返し、ずっと余韻に浸っていたくなる。

発話されなかったコトバの余韻に浸っていると、「消えた影」では「彼らは廊下や非常階段で覆面の男を目撃したとしても、通報するゆとりのない人種だ。というよりも、彼らとはとにかく責任を持つという状況を回避したいのだ。(中略)彼らが恐れているのは倦怠ではなく責任。責任以上に損失を忌み嫌う」と、声をあげるべきことに目を背ける普通の人々を静かに、痛烈に批判している。「インタビュ」のナターリアが感じた冷たい視線——「数多あまたの人々が無遠慮に、一方的に彼女を眺めては通り過ぎていった」——や、「女に道を訊く」の巨人症の女が気づかないふりをしていた人々の視線——「男の子は小人の国に紛れ込んだ巨人を見るような目で、不思議そうに女を上から下までじろじろ見ている。前の十七インチのテレビでサッカーの試合を見ていた人々も、二メートルはありそうな長身の女にちらちら目を向けていた」——に対しても、作家はやはり静かに、毅然と訴える。彼女たちが求めているのは好奇の眼差しではなく、優しい眼差しであることを。

この作品集を色で表現すると、濃淡さまざまな闇色を基調にしている。「消えた影」の影さえ持つことを許されない男が自由に動けるのは、人目につかない夜半のビルの屋上だけで、「そして、一週間」の主人公は、花冷えのする四月のドイツで深夜に見知らぬ男に身を任せ、H I Vウ

イルスに感染した。「背後に」はどんよりと曇った雪の日が背景だ。「記念写真」の元舞台女優は病で光を失い、同じマンションに住む男は冤罪で服役するが、出所後もサングラスを外せずにいる。「女に道を訊く」では雨が降る夜明け前の暗い海の中に沈んでいく。その誰もがすべてをひたりに抱え込み、感情をさらけ出せる者をもたない。自ら声をあげない(あげられない)者に救いの手を差し伸べようとする者もない。それは現代社会の縮図を見ているようでもある。七編の作品はそれぞれ独立した物語だが、この一貫したモノトーンの色調と沈黙により、連作短編集であるかのような雰囲気を漂わせる。文芸評論家の申亨澈シンヘンテック氏は「一緒に読まれてこそより強固になる七つの物語」とし、この作品集を「他者の小説」と名付けた(原作「作品解説」より)。

モノクロームのような作品集ではあるが、読んだ後に残るのは冷気ではなく温もりだ。作品に至る所に、幸せや希望を象徴する黄色や橙色たんぱい、情熱や生命を表現する紅や緑、優雅で尊いイメージを持つ紫、といった鮮やかな色が差し色のように添えられている。それは無機質な物語に温気を吹き込んでいくようでもある。淡々とした簡潔な文体の中にも時折顔を覗かせる詩的な表現もまた、張りつめた物語の空気を和ませる。「記念写真」と「女に道を訊く」では、それぞれ互いの話に耳を傾けてくれる相手を見つけたことも救いになる。そしてなによりも、この作品集に温もりが感じられるのは、地球の片隅で、それでも生きていくことを決意した人々から発せられる、いまにも消え入りそうな幽かすかな光を、作家が丁寧に紡いでいるからなのだろう。

本書を通じて原作者のチョ・ヘジンさんとご縁ができたことは、訳者にとって何物にも代えがたい幸運です。

二〇〇八年に原作の編集を担当された新人編集者が、二〇一七年に「当時、この作品と作家に恋をしてしまった。二十五歳だった私は、周りの先輩方に『見ていてください。チョ・ヘジンさんは絶対に成功します。長く、深く、彼女にしか書けない物語を書いてくれますから』と豪語した。九年が過ぎた現在、私は『ほらね、言ったとおりでしょう』と胸を張って言えるようになった」(前出「Litro」六号)と振り返っていたのが印象的でしたが、いまの私も同じような気持ちです。チョ・ヘジンさんの深い作品世界は今後、きっと日本の皆さんの心にも響くはずだと……。後に知ったことですが、その新人編集者とは、いまでは『ファイティン・ピープル』や『保健室のアン・ウニョン先生』などで人気作家になられたチョン・セラさんでした。驚きとともに、若いお二人の初々しい出会いを想像するだけで愉たのしい気持ちになりました。

チョ・ヘジンとチョン・セラさん、いまをときめく二人の小説家を結びつけた本作品集を日本の読者の皆さんと共有できるのも、新泉社編集部の安喜健人さんのおかげです。この場をお借りして、あらためて心よりお礼申し上げます。物語のイメージにぴったりの装画と扉絵は画家の

イシサカゴロウさんの作品です。使用を快諾してくださったイシサカゴロウさん、素敵な装幀に仕上げてくださったデザイナーの北田雄一郎さんにも厚く感謝申し上げます。

本書の翻訳を完成させるまでに多くの方々の支えがありました。韓国文学翻訳院の皆さんのサポート、大きな力になってくださった崔孝貞チュヘヒョジョンさん、温かく応援してくださった翻訳家の岡裕美さん、感謝の気持ちでいっぱいです。文芸翻訳というこの魅力的な世界に第一歩を踏み出せたのは、翻訳家の姜芳華カンバンファさんが背中を押してくださったからです。ここに深い謝意を表します。

本書とチョ・ヘジンさんの温かさが一人でも多くの読者のもとへ届くことを願ってやみません。

二〇二二年十一月 珍島犬の姿をした天使たちのいる坡州パジュにて

呉華順